

# 介護職員と学生が同じ事例を検討することによる学習効果

原 田 欣 宏

## Learning effect by care worker and students examining the same case

Yoshihiro HARADA

高崎健康福祉大学紀要 第17号 別刷

2018 年 3 月

# 介護職員と学生が同じ事例を検討することによる学習効果

原 田 欣 宏

(受理日 2017年9月29日, 受稿日 2017年12月21日)

## Learning effect by care worker and students examining the same case

Yoshihiro HARADA

(Received Sept. 29, 2017, Accepted Dec. 21, 2017)

### I 緒言

#### 1 研究の背景

介護福祉士を志す学生が、就職してすぐに利用者自身の生き方を感じ取り、希望や要望を読み解き、利用者の尊厳を守るための介護を提供できることは困難である。そのためのトレーニングとして、授業で学んだ内容を総合的に活用し知識の統合を行う場面として「介護実習」や「介護過程」がある。本学においては3回に実習を分割し、その最後の実習において24日間かけてアセスメント、実施、評価まで行う。日常業務の実習を行いながらこれらの演習を行うことは、アセスメントに慣れていない学生にとって大きな負担であると感じている。この結果、十分に考察を加えられないままに計画の立案、実施、評価に至るものも、ある一定のレベルに達していれば単位認定を行っている。限られた時間で学ぶ内容を調整する場面はどうしても存在する。

現場の介護職員が事例検討を行い文章化する場面は、例えば医療現場のそれと比較すると量

的に大きな差があり、十分実施できているとは考えにくい。介護現場の業務が多忙であり、研修などの時間を割くことについて相当の苦労があることが言われて久しい。また、事例検討の内容を指導、評価することのできる人と時間が限定的であることから、十分な発表の場面がないことも問題である。

以上のとおり、学生と介護職員の「学びの場面」には不足する部分があり、効率よく補完する方法があれば、介護福祉士の資質向上に寄与することができる。また、事業所においては、単独で事業所内研修を実施することが困難と感ずることが多いため、効率的な研修システムの構築は介護の質向上に寄与することにつながるものと考えられる。

#### 2 先行研究

「介護過程の展開」は介護福祉士養成課程の指定科目であり、平成21年4月より新設された科目である。すでに8年が経過しているものの、この科目を履修せずに介護福祉士の資格を得ているもののほうが圧倒的に多い。このため、

事業所が独自に「介護過程の展開」の要素を取り入れた研修を行うことは難しい。国立情報学研究所のCiNii (NII 学術情報ナビゲータ) を用いて「介護過程」「研修」のキーワードで検索をかけた結果、7本の論文が該当した。内容を精査したところ、杉山<sup>1)</sup>は、ベテラン介護福祉士による「介護過程の展開ツール」を用いた研修を通して、「ケアプランで分担された介護内容を介護福祉独自の介護過程の展開をし、分担された介護内容の質を高め、より良いサービスにすることが介護福祉士の専門性の具体化につながる」として、介護過程を現場職員が学ぶことの効果について言及している。これ以外の文献で職員の介護過程の展開を用いての学習効果について論ずるものがなかった。また、学生とコラボレートを行っての学習効果については言及している論文はなかった。このため、本稿で扱う「介護職員の学習効果」と「学生の学習効果」との連携効果の双方を扱う先行研究がない。

### 3 研究の目的

本研究は、介護職員と学生が「介護過程の展開」の手法を用いて、双方が効果的に学習効果を得られるシステムを構築することである。その手段を構築するために、同じ事例を検討するための方法を整理する。

今回の研究では、前年に事例発表を行った原稿をもとに学生が「介護過程の展開」の手法を用いて事前学習を行い、発表者のもとに訪問する。そして事例発表者との交流を通してケアの本質を共有することで、双方の学びを深めるシステムを構築することにある。

このため本稿では、1) 介護過程の展開を用いたことによる介護職員と学生の事例に対する相互理解の評価、2) 発表者の振り返り機会の

提供による学習効果、3) 学習プログラムとしての評価、について報告する。

## II 研究の方法

### 1 用語の定義

本稿において重要なキーワードとなる「私の思い」の定義を「アセスメント対象者がどのように「生活したい」「生き抜きたい」「人生を全うしたい」と考えていること」とする。「私の思い」を推察し、可視化することが発表者と学生がケース理解の共有を目指すうえで重要な役割を果たすものと考えられる。

なお、センター方式<sup>2)</sup>におけるアセスメントシートCにある「本人の思い」は「今、本人が苦しんでいる心身の状態の全体像を客観的に集約し、個々の状態の関連を探ります。あわせて、そうした心身の状態をもちながら本人がどのような姿と気持ちで今を過ごし、『何を求めているか』を把握し、本人がよりよく暮らすための課題を、本人本位の視点に立ち返って探ります」<sup>3)</sup>としている。センター方式に限らず、多くのアセスメントツールには「自立支援」「自己決定の尊重」など社会福祉基礎構造改革により利用者本人の意思を尊重するケアの実践と、契約制度の導入による権利と義務を実現する為にケアマネジメントツールの開発は進化している。その意味においては、支援を必要としている人の課題（ニーズ）を把握する視点はほかのアセスメントツールと同様の方向性である。

それでもなお「私の思い」と言い直しているのは、利用者本人を主体としていつでも考える重要性を強調するために、本学では介護実習におけるアセスメントツールにこの用語を利用していることからである。そして、この使い慣れ

たツールを用いて介護過程の展開を行うことから、この概念が発表者だけではなく、広く介護職員に受け入れられるものかを確認する意味でも重要である。

## 2 調査の概要と対象者、スケジュール

### 1) 調査の概要

平成 29 年 3 月に群馬県地域密着型サービス連絡協議会（以下「協議会」）事務局に問い合わせを行い、協議会主催「平成 28 年 8 月開催「第 14 回群馬県認知症小規模多機能グループホーム大会」（以下「昨大会」）において事例発表を行った介護職員（以下「発表者」）の抄録を基盤に、介護福祉士養成課程の学生（以下「学生」）が「介護過程の展開」を授業で使用したオリジナルのアセスメント用紙紙面上で情報の整理を実施する。

その後発表者の勤務する事業所に学生が訪問し、事前に学生が作成した介護過程の展開における「私の思い」を推察した内容を中心に理解を深め、再度整理を行う。その成果を学生は「第 15 回群馬県認知症小規模多機能グループホーム大会」（以下「本大会」）で研究発表することで可視化を行う。これらを振り返り、双方向の「学びあい」の可能性についてアンケートを実施する。

### 2) 対象者

(1) 発表者は本企画の協力を得られた法人 A の事業所からの発表者で調査すること協力依頼を行い、了解を得た。

その後、昨大会の要旨集から、①抄録に基本情報についてある程度記載のあるケース、②学生および教員が発表者の所属する事業所に訪問調査ができること、③訪問時には発表後の支援経過について説明することを含めた職員への

インタビューが可能であること、を条件に法人 A 事務局長と相談を行い、3 ケースを選択した。それぞれの発表者に対しては法人事務局長より概要説明を依頼して、内諾を得た。

(2) 学生は本学社会福祉学科介護福祉コース 4 年 17 名を対象とする。「介護の基本 VI」（4 年前期・必修）授業の一環として実施しており、当該学生は全員参加で実地踏査とアンケート調査を実施した。

### 3) 企画全体のスケジュールと概要

(1) 事業所に研究企画の趣旨説明

訪問する事業所を統括する法人事務局長に企画の趣旨説明を行い、実施の同意を得る。その後、事業所に対して書面で企画説明を行う。また、訪問時までにはインタビューの実施、個人情報の取り扱いに関する説明と同意書を送付する。いずれも学生による訪問前までに回収する。

(2) ケースの理解、事業所の理解（4 月）

学生は 4 月より要旨集にある担当教員から指定された事例について介護過程の展開を実習で使用したアセスメントシートに情報を整理した後、「私の思い」を推察する。あわせて、「小規模多機能型居宅介護」「認知症対応型共同生活介護」の制度的な役割についても復習を行う。

(3) 事業所訪問調査（5～6 月）

学生が報告者のもとに訪問し、事前に作成したアセスメントをもとに「私の思い」を推察して作成する。この内容が正しいかどうか報告者に検証を求める。このほか、アセスメント対象者に関する昨大会以降のことについてアセスメント用紙に情報を整理するために必要な生活状況やケアの変化、「私の思い」について聞き取りを行う。

(4) まとめ、発表（7～8 月）

訪問調査で得られた情報を整理して本大会

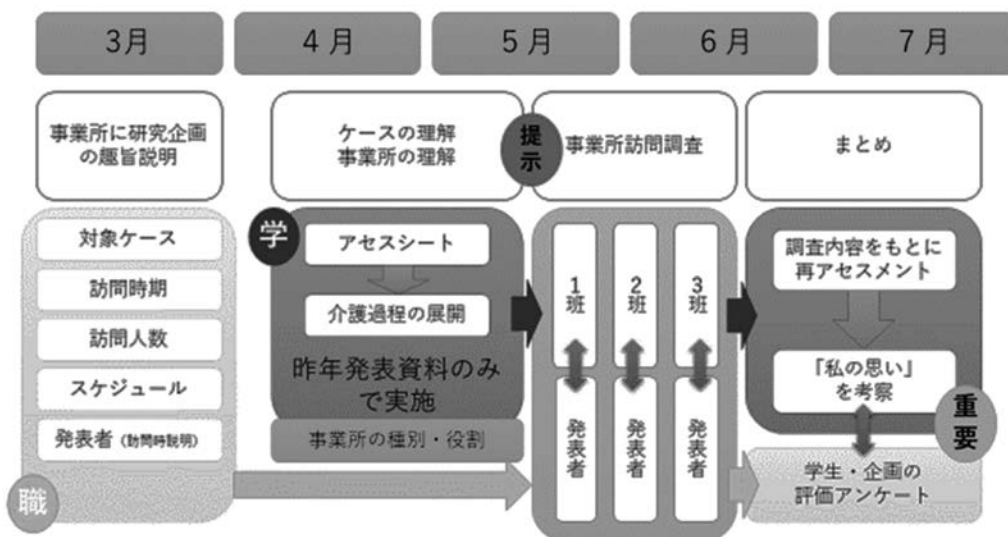


図 研究スケジュールと受け入れ事業所および学生の動き

の発表に向けて、発表者の考える「私の思い」、展開されたケアの内容と根拠を、アセスメント用紙を作成しながら整理を行う。その内容は PowerPoint、抄録原稿の作成に集約し、発表を行なう。

### 3 調査方法

#### 1) 発表者に対するアンケート調査

##### (1) 調査の趣旨

学生の行う昨大会の発表内容と、それ以降の状況に関する聞き取り調査の様子、自分自身の発表内容振り返りに関する内容を行う。

##### (2) 項目

学生が介護過程の展開を行ったアセスメントシートと事例から導き出した「私の思い」に対する評価と、抄録に掲載された内容が「私の思い」を推察するために必要な情報を提供できていたかどうか、自己評価を行った。

調査項目は以下の通りである。

##### ①事例の概要

##### ②支援内容と結果

##### ③「私の思い」

※「私の思い」とは、対象となる利用者のニーズを支援者が推察して文章化し、ケアを提供するための根拠とするアセスメント項目です。

##### ④支援の工夫した点（以上4項目の評価尺度）

- ・学生のまとめ（よくまとまっている・まとまっている・やや不十分・不十分）【理由】（自由記述）
- ・自分の発表に記載されている情報量（適切・おおむね適切・やや不十分・不十分）【理由】（自由記述）

##### ⑤「私の思い」に関する、普段の業務での実施状況についてお伺いします。

- A、「私の思い」に類することを文章化（1 している・2 していない）
- B、アセスメントの段階で「私の思い」の文章化を行っていた、または意識していた
- C、「私の思い」を意識して計画を立てていた
- D、「私の思い」を意識してケアを提供して

いた

E, 「私の思い」を意識して評価をしていた  
B～Eについては、評価者の考えに近いものを一つ選択（実施している＝5, 実施していない＝1, の5段階評価）

## 2) 学生に対するアンケート調査の実施

### (1) 調査の趣旨

当初から情報不足であることを想定されていたので授業進行から「私の思い」を中心に介護過程を展開し、訪問時には発表者の意図をくみ取ることが可能であったか検証することを目的とする。

### (2) 項目

事前準備や訪問調査、研究発表のために介護過程の展開を行う上で必要な資料がそろっていたかどうか確認する項目を中心に自由記述欄を設けながらアンケートを実施した。

調査項目は以下の通りである。

① 昨年の発表事例（抄録集の記載内容）について伺います。

もともと「利用者の思い」を記載する書式になっていない今回の発表事例から、あなたは抄録集の記述内容から「利用者の思い」を推察することはできましたか。次のうち自分の考えに近いものを一つ選択してください。

② 前の設問（「私の思い」を推察する）で選択した理由を、具体的に教えてください。（箇条書きでも可）【自由記述】

③ 「介護の基本Ⅵ」の授業について伺います。

4～5月の「事例をまとめる」期間のことについて伺います。次の選択肢のうち自分の考えに近いものをすべて選択してください。

(1) 査訪問時のことについて伺います。発表者に対して質問を充実させるために、どのような準備が必要だと思いますか。今回の経験を踏ま

えて対策を考えてください。【自由記述】

(2) まとめ期間（6～7月）について伺います。  
抄録の原稿をまとめたことについて、よかった点、自分にプラスになった点を教えてください。【自由記述】

(3) まとめ期間（6～7月）について伺います。  
抄録の原稿をまとめる作業を通して、難しかったこと、改善すべきことを教えてください。【自由記述】

(4) 大会で口頭発表を行うことについて伺います。

「今後、就職したときにこの経験は生かすことができる。」次の選択肢の中から自分の思いに近いものを一つ選択してください。

(5) 授業全般について、意見、感想をください。【自由記述】

## 3 調査のスケジュール

発表者については、平成29年5月～6月に実施した訪問調査時に調査者よりしたアンケート用紙を直接配布した。回収は返信用封筒を同封の上、郵送で回収を行った。

学生については、平成29年8月にC-ラーニングシステム<sup>4)</sup>を活用して実施した。

## 4 倫理的配慮

報告者については、アンケート用紙配布時に口頭および書面にて1) 自由意思に基づき協力を依頼するものであることからいつでも中止が可能であること、2) 個人（アンケート回答者、クライアント他、記載されたすべての人）を特定されない形でデータ化および公表、活用すること、3) アンケート用紙およびデータは、データ化が終了したのち廃棄処分すること、4) アンケートの結果を公表、活用するときには、個



個人情報の匿名化を厳守すること、5) 研究・研修の資料に活用すること、を調査票の書面および口頭で説明し、同意を得て実施した。

学生についてはC-ラーニングシステムを活用しており、アンケート項目の1番目に報告者と同様に1)~5)について文書で示し、同意の是非を選択する方法で同意したことを確認した。

なお、本稿には開示すべき利益相反(COI)に該当する事項はない。

### Ⅲ 結果

#### 1 発表者へのアンケート結果

対象者は3事例3名で、回収率は100%である。アンケートの自由記述について、内容を損なわない程度に修正を行っている。

##### 1) 事例の概要

###### (1) 学生のまとめ

学生が4月より準備した資料のうち事例概要をまとめた記述の内容について、発表者全員が「よくまとまっている」と解答しており、「わかりやすく、簡潔にまとまっている」としている。

###### (2) 自分の発表に記載されている情報量

発表者が作成した抄録原稿について、学生が理解できるような情報量であったかどうか、自己評価を求めた。その結果、「適切」2名、「おおむね適切」1名であった。

その理由として「細かいことも書き、お二人がどんな方かわかってもらえるように心がけたから」「人物像を想像してもらうために必要な情報は記載してある」としている。

##### 2) 支援内容と結果

###### (1) 学生のまとめ

抄録の内容から読み取りのできた個別支援計画について、施設介護計画第2表に準じた様式

で記載したところ、全員から「まとまっている」との評価であった。その理由として「抄録の情報量が少なかったから、目標と書いてあるが、これが結果と見てすぐわかるようにまとめてあるとよかった」と自らの文章に対する分析を行っている。

###### (2) 自分の発表に記載されている情報量

抄録に記載した内容について「おおむね適切」が2名、「やや不十分」が1名であった。その理由として、「二人(の利用者)のうち一人のことがあまり(抄録に)書かれていなかったから」(カッコ内は筆者注釈、以下同様)として、アセスメントを行うためには情報が不足していたと分析している。また、「この支援をしたことで～につながったとある程度分かりやすく伝えることができたから」と、自らの表現した内容が適切であったことを確認したり、「下肢筋力の衰えに対するサービス内容の中でなぜシルバーカーの使用をやめたのかの説明が不足している」など、自らの改善点について指摘している。

##### 3) 「私の思い」について

###### (1) 学生のまとめ

本研究の中心となる部分であり、発表者と最も共有したい部分である。回答は「よくまとまっている」が2名、「まとまってい」1名であった。5~6月訪問時に学生は事例の内容について説明を行っているが、発表者の意図を理解している趣旨の評価を得ていた。自由記述欄にも「自分が伝えたかった二人の「思い」をしっかりとくみ取ってまとめていると思う」「限られた文字数の中から、表情などを思いうかべ、きっとこう思っているだろうということが読み取ることができていると思ったから」との回答であった。

###### (2) 自分の発表に記載されている情報量

学生が作成した「私の思い」を解釈するため

に必要な情報量が確認したところ、「適切」は1名、「おおむね適切」は2名であった。その理由として、「二人のそれぞれの「思い」に着目し、それについて書くように心がけた」とある一方、「もう少し本人の思い（言葉）を入れたらよかった」「思いを細かく漏らさず書き込むことができたかどうか不安がある」など、発表時の抄録に紙幅の制限があることも含めて課題も残るものと考えている。

#### 4) 支援の工夫した点

##### (1) 学生のまとめ

「よくまとまっている」は1名、「まとまっている」2名となった。その理由として「情報量が少ない中から、しっかり抜き取りまとめていると思う」「工夫したことをしっかり読み取り理解できていると思ったから」と評価している。

##### (2) 自分の発表に記載されている情報量

学生の作成する「支援の工夫した点」をまとめるのに必要な情報が記載されていたかどうか問う質問である。「適切」は1名、「おおむね適切」は2名であった。その理由として「行っていた支援については記載している」とした一方「二人のうち一人のことがあまり書かれていなかったから」「3つの工夫以外にも、工夫できたことをもう少し取り入れられたらよかった」として、表現の方法に関する課題をとらえている。

#### 5) 「私の思い」に関する、普段の業務での実施状況について

##### (1) 「私の思い」に類することを文章化

「している」が2名、「していない」が1名であった。

##### (2) アセスメントの段階で「私の思い」の文章化を行っていた、または意識していた

5段階評価（低1～5高）の評定平均値＝4.3であった。その理由として「ご家族やご本人か

らどうになりたいかやどうなってほしいかを聞き、それを文章化し、職員全員と共有している」「最初にケアプランを作成する際、本人に直接聞いたり家族に聞き取りしたことで文章化しているが、それ以後は本人の言動を吟味しながら「思い」の変化を意識している」「頭の中では思っているが文章化にする行動までできていないから」としており、実践においても「私の思い」を意識したケアを実践していることが窺える。

##### (3) 「私の思い」を意識して計画を立てていた

5段階評価（低1～5高）の評定平均値は4.3であった。その理由として「どの方に対しても、その方の「思い」を意識し、どうしていくか決めている（計画を立てている）」「以前の本人を知り、本人の希望に沿った計画を立てる努力をしているから」「ケアプランに反映させている」としている。

##### (4) 「私の思い」を意識してケアを提供していた

5段階評価（低1～5高）の評定平均値＝4.3であった。その理由として「その時々でこうしたほうが良いんじゃないかと試行錯誤をして、その方の思いや望みに近づけるようケアをしている」「何かケアをする前は本人の意思を聞き、ケアを提供するようにしている」「「思い」を達成するためのケアは提供できているが、本人の状態を考えて未達成のものもある」としており、ケアの実践に「私の思い」を常に意識していることが窺える。

##### (5) 「私の思い」意識して評価をしていた

5段階評価（低1～5高）の評定平均値は4.3であった。その理由として「実現できているかなど職員で話し合い、改善点なども導き出し、評価、共有している」「何事に対しても、まず本人の希望は聴き、評価していた」「モニタリングで定期的に行うことで達成度合いを測ってい



る」としており、意識することが基盤となっていることが窺える。

## 2 学生へのアンケート結果

17名対象で16名の回収となり、回収率は94.1%である。自由記述によるものは、語彙の意味を分析し、趣旨を損なわない程度に整理をおこなった。

### 1) 昨大会抄録を利用することについて

昨年の発表事例（抄録集の記載内容）について、もともと「私の思い」を記載する書式になっていない抄録集の記述内容から「利用者の思い」を推察することの困難さについて確認した。

その結果「とても分かりやすかった」が2名（13%）、どちらかというとわかりやすかった＝5名（31%）、どちらかというとわかりにくかった＝8名（50%）、とてもわかりにくかった＝1名（6%）であった。

### 2) 昨大会抄録を利用することについて

前の設問（「私の思い」を推察する）で選択した理由を、自由記述にて回答を求めた。その結果、「援助者からのサービスを行った時の反応や他者との関わりが書かれていたので、理解がしやすく感じた」との意見が少数あったものの、「本人のこういう思いや考えがあるといった表現があまりなかった」「言葉だけではわからない細かな心境の変化を知ることができなかった」「現在までのADLの変化や認知症の進行度を推察するのは難しい」「対象者の日頃の様子ではなく、部分的な所を切り取って書かれているため理解し難い箇所が多々あった」との意見が多数であった。

### 3) 4～5月の「事例をまとめる」期間の授業内容について

学生に下記の選択肢の中から考えに近いもの

をすべて選択することで感想を求めた。

「事例の内容はおおむねわかりやすかった」が8名（50%）、「まとめるためのアセスメント用紙が「介護過程」で使用したものと同じであったが、特に問題はなかった」が5名（31%）、「事例をまとめるための時間はおおむね適切である」が7名（44%）、「発表者が利用者自身の思いを受け止めてケアを提供していると感じることができた」が9名（56%）、「今回担当した事例研究を読んで、将来的に自分自身で取り組むことは必要だと思った」が10名（63%）であった。

アセスメントを行うことを想定していない抄録から読み解くことについて、自分なりに理解できたと感じている学生が半数程度であった。しかし、これを文章化することに困難さを感じている学生が3分の2程度と増加している。

### 4) 質問の事前準備について

調査訪問時に発表者に対して質問を充実させるために、必要な準備について確認した。自由記述での回答の結果、以下の通り分類することができる。

#### (1) 時間が不足

「事例検討をする時間とは別に質問を考える時間が欲しかった」

#### (2) 事前に質問を検討すべき

「自分だったらどのような支援をするのかなどを考えて質問をしてみたかった」「事前準備が不足して質問できなかった」

#### (3) 「私の思い」の理解重視の必要性

「発表者が何を伝えたいのか、思い入れがあるのは何か、それを常に考えることが大切だと思った」

#### (4) 訪問時の役割分担の必要性

「訪問後に疑問に思うこともあったため、事前に発表後の状態についてある程度想定して質

問事項を考え、訪問後に疑問に思うことがないようにすることが必要だったと思いました」「訪問時の役割分担（メモ担当、質問担当など）が必要だと思う」

施設の特徴、ケアの内容と「私の思い」を瞬時につなぎ合わせ質問することの難しさを感じている回答がほとんどである。

#### 5) まとめ期間（6～7月）について

抄録の原稿をまとめたことの評価を求めた。自由記述にて回答の結果は以下の通りである。

- (1) ケースに対する理解が深まった「利用者さんの思いが、はっきりと見えた気がした」
- (2) 多角的な理解につながった「グループのメンバーの様々な意見を聞き「私の思い」をより深く理解することができた」「発表当時と発表後の心身状態の比較が出来たため、何が影響していたのか等々考えることが出来た」「他者の質問から自分が感じたことを伝える、グループでの話し合いに参加し、まとめようとする方向性を導こうとする積極性が向上したと感じた」
- (3) 将来の仕事に対するイメージ「将来の職員同士の連携に繋がれると思う」「自分が介護職員として働く時のイメージが膨らむのでよかったと思う」
- (4) 介護過程の技術向上「情報はかなり引き出せたつもりでも、まとめる作業をすると足りなかった部分や、書き方に悩むことに気づけた」「ケアプランを表などに実際にまとめることで読み手にも分かりやすくなっている」「表題ごとにまとめていくことで、読み返す際に間違いに気付く易くスムーズに訂正できた」

グループ討議を繰り返すことで、さらに「私の思い」について理解を深めることができた点と、相手に分かりやすい作表、目次づくり、プレゼン方法を検討することができた点について

指摘する記述がほとんどであった。

#### 6) 本年大会での口頭発表について

口頭発表を行ったことが、就職後に経験に生かすことができるか尋ねたところ、そう思うが7名（44%）、どちらかというと思う＝9名（56%）であり、肯定的な回答であった。

#### 7) 授業全般について

自由記述で意見や感想を求めた。その内容を分類すると以下の通りである。

##### (1) 事業所理解

「NPO 法人について知ることができて、将来への視野が広がった」

##### (2) プレゼンテーション技術の向上

「ワードやパワーポイントを使うことでパソコンの技術や表現方法もよく学べたと思う」「利用者の情報をまとめニーズを見極めることは働いてからも使うスキルだと思った」「発表の内容から対象者の思いを自分たちなりに推察していくことは、発表者の見解もあるため難しかった」

##### (3) 「私の思い」可視化の意義理解

「文章だからこそ確実にわかる利用者の心境や身体の変化や状況、それに対する対応等を基盤に色々と考えることができた」「今後、福祉の職についた際には、いずれ支援計画を立てるという場面が出てくると思うので、このような利用者の状態や生活から利用者の思いを理解し、ニーズにあった支援を探るというのは良い練習につながると感じた」「今回の利用者のその後の様子を職員の方から聞き検討することは、必ずしもプラスの状態が維持される訳ではないということを知ることが出来た。その上でこれ以上悪くならないようにするにはどうすればよいかを考える良い機会になった」

#### (4) グループワークの意義理解

「グループで行ったため自分1人では考えつかない発想や推測、考察の考え方など学ぶことが多々あった」「グループワークは、今後直面するであろう職員同士の連携に役立てられると思うが、実際の支援方針の検討では、利用者と深く関われるからこそ、その人のニーズを充足出来る支援を考えなければ、結果が残せないと思った」「今回の事例発表からこれまで学習したことを踏まえて行ってきたが、自分の考察力や情報をまとめる力がまだ足りないと感じました」「課題を決める早さと考察の深さがもう少し必要になると感じた」

#### (5) 授業の進め方

「負担は大きいと感じた。最後に得るものはたくさんあったが、もっと早く聴きたい話や、就職につなげたいと思った話があった」「実習で大変な事は分かるが、できれば2～3年生のうちにやっておきたい内容だったように思った」「基本的に学生に任せて授業を進めていただけだったので、こちらも意欲的に取り組むことができた」

#### (6) 対象者理解の方法

事例について文面だけでなく、実際に訪問することで、更に深く事例を知ることができた」「訪問が一度だけという状態でまとめるのは難しい部分がありました」「利用者さん本人から直接意見を聞けなかったのが心残りであった」

### 3 小括

#### 1) 介護過程の展開を用いたことによる介護職員と学生の事例に対する相互理解の評価

発表者は、一連の学生が行った調査から発表までの様子から、1-1) 事例の概要 (1) 学生のまとめ、2) 支援内容と結果 (1) 学生のまとめ、

3) 「私の思い」について (1) 学生のまとめ、4) 支援の工夫した点 (1) 学生のまとめ、での回答から、おおむね意図を捕らえてもらったと評価している。しかし学生は、2-1) (2) 自分の発表に記載されている情報量、2) 昨年大会抄録を利用することについて (2) 自分の発表に記載されている情報量、において記載内容から「私の思い」を推察するための言葉を拾うことは困難と感じている趣旨の記述がほとんどであった。「わかりやすい」と感じた学生は4名(25%)であった。

#### 2) 発表者の振り返り機会の提供による学習効果

発表者は1-1) 事例の概要②自分の発表に記載されている情報量、2) 支援内容と結果②自分の発表に記載されている情報量、3) 「私の思い」について②自分の発表に記載されている情報量、4) 支援の工夫した点②自分の発表に記載されている情報量、では「適切」「おおむね適切」を選択しており、学生の理解した内容を確認したことにより実感できたことが明らかになった。

また、「私の思い」に関する記述を業務内においてどの程度実施できているか、については、意識して業務にあたっているものの、文章化に向けた取り組みについて改善の可能性を感じている。

#### 3) 学習プログラムとしての評価

発表者については、質問項目として直接評価を依頼していないものの、自由記述にある内容には、学生の取り組み内容に対する評価は高かった。また、自らの発表を振り返る記述がなされた。

学生については、2-6) 本年大会で口頭発表について、のとおりに発表できたことに大きな意

義を感じている。しかし、1) 昨大会抄録を利用することについて、においてはもともと抄録集が「私の思い」を記載することを意図していないことから、わかりにくいと感じている。また、3) 4~5月の「事例をまとめる」期間の授業内容について、では、「介護過程の展開Ⅴ」で使ったアセスメント用紙を使用したものの、少ないデータで作成することに限界を感じている。

なお、4) 質問の事前準備について、では、質問項目の整理が事前に出来ていないことから、十分な質問ができなかったことを反省点として挙げている。

## IV 考察

### 1 介護過程の展開を用いたことによる介護職員と学生の事例に対する相互理解の評価

#### 1) 実践報告を考察するためのシステムとしての評価

現場職員である発表者より、学生が介護過程の展開を用いて自ら発表した内容に関する考察を行っている。学生のケースに対する理解について肯定的な評価を行っているのは、事前学習を実施した上での評価であることには意義がある。

#### 2) 介護実習における「私の思い」を検討するプロセス

学生との関係はそのほとんどが実習を通してであり、自分自身のケア実践に対する個別具体的な考え方を披露する機会は実習生の指導担当でなければほとんどない。学生にとっては、実習時には学校より課題が提示され、それに沿って実施するものである。

学生は、実習の最終段階、あるいは終了後においてアセスメントツールを用いた事例検討を

行うことから、利用者理解を深めることは行っている。ただし、アセスメントの実施主体は学生であり、指導者として関係する現場職員にとっては、学生の気づきを引き出す指導を心がける必要もある。つまり、学生が最終的に事業所で得られるすべての情報を扱っているとは言えない部分がある。最初から「私の思い」を直接伝達するような指導はなされないといえる。

### 3) ケースに対するアセスメント実施とその評価までの課程

以上のことから、学生はこのような取り組みを行うことで、事例の相互理解の実践を示すことはできた。ただし、学生の「私の思い」に対する理解の満足度が低い傾向であることに注意が必要である。昨大会の抄録のみで事前準備を行い、情報不足ながら事例を想像しながら読み解いたストレスを、訪問時にどの程度開放できたかに問題がある。

学生の事例に対する理解やまとめた内容への満足度が低いのは、発表者や担当教員から満足できるだけの情報提供ができていないこと、あるいは学生自身による気づきのプロセスにかかる時間の配慮が不足していたことによるものと考えられる。

### 2 発表者の振り返り機会を提供することによる学習効果

#### 1) 現場職員の研修環境

発表者には昨大会の内容をもとに行うことから、自分自身が作成した抄録を学生の理解に合わせて説明するプロセスが存在する。このことによる振り返りの場面を作り出すことを目的の一つとしていた。

施設内外の研修を受講することが多くの事業所にとって負担となっていることから、事業所

に訪問する学生に対するレクチャーの場面を創設することにもつながった。

今回の取り組みは、学び合いの要素を取り入れることで、継続して取り組むことにつながることにある。結果として、発表者は自分自身の発表内容を読み解く学生の取り組みに対して、「私の思い」を軸に検討している。このことから発表者も自らの発表を「私の思い」の視点をもって返答することにつながった。

## 2) 介護過程の理解浸透

そもそも「介護過程」を介護福祉士養成課程において導入されたのは、平成21年度施行の「社会福祉士及び介護福祉士法」改正により科目として新設されたものである。このため、現場においてこの科目を履修して介護福祉士になった介護職員は比較的に少数となる。つまり、学生が介護過程の展開を実践する場面から、教育の場面で学習する内容を把握することにもつながったともいえる。

また、発表者自身については、発表当時のことを振り返りながら改善点を検討することにつながっている。さらに学生の理解した内容を確認したことにより、発表したことによる自分自身の意図したことが他者に伝わったことを実感できたことが明らかになった。

一般的には、発表者が登壇した時に会場の反応や質問によって同様の実感を得ることが可能である。ただし、本年大会の状況から、登壇する助言者が発表に対するコメントをするにとどまっていることから、多くの参加者からコメントを得られる状況にはない。このことから事例を深く理解する努力をした学生が訪問して、現状との比較を直接語る機会を発表者がもつことが、次の発表に向けたモチベーションの向上につながるような仕組みも検討する必要がある。

る。

## 3 学習プログラムとしての評価

発表者に対する「学習プログラム」は、今回の研究結果によって検討することとしていた。このため、実践状況から今後の展開に結びつくことが期待される事項を整理したい。

### 1) 発表者による学生への伝達や指導内容の標準化の検討

学生の事前準備における段階で学生が困難と感じた部分に対するフォローの必要性である。発表者どのように関与するかを検討する必要がある。アンケートの結果から、発表者が発表内容を理解されていることに関する実感はある。しかし、学生には十分ではないと感じている。その一因として「私の思い」を伝達するために必要な方法が確立していないことにある。つまり、発表者が学生へのレクチャーに関する技術を、担当教員が事前に伝達することも検討が必要である。

### 2) 発表者への「介護過程の展開」に関する理解の強化

前項においても述べた通り、今回の発表者は介護過程を養成校では履修はしていない。しかし、実践内容と「介護過程の展開」のねらいが共有できていれば、学生の質問する意図を広く把握することが可能となる。

発表者に対するアンケートの結果から、学生は発表者から「私の思い」を推察する内容をある程度聴き取れている。また発表者は学生の発表内容について肯定的な評価を行っている。このことから学生が発表者の意図をくみ取っていることを確認することができる。しかし、学生は十分な聴き取りができていないと感じているものが、半数程度は存在する。



このギャップを解消するためには発表者と学生の間で再度質問をする時間を作るなど、システムの改善が必要である。また、書式の改善により学生がまとめる「介護過程の展開」のゴールがどこにあるか発表者に理解されることが必要であろう。この企画の効果を高めることにつながる。

整理された書式をもとに、「介護過程の展開」の意図を発表者に説明することができれば、それに合わせた情報提供が効果的にできる。学生の質問する能力の向上とともに、発表者にもケアの意図を明確に伝達するためのツールに発展させる可能性を秘めているといえよう。

## V 結論

### 1 本システムの可能性

本研究の目的は、介護職員と学生が「介護過程の展開」の手法を用いて、双方が効果的に学習効果を得られるシステムを構築することである。

学び合いの手段を構築するために「介護過程の展開」の手法を用いて事前学習を行い、事例発表者とケアの本質を共有することを目指した。この結果、双方の学びを深める方法として学生が事業所に出向き、同一事例を用いて指導を受けるスタイルは、ケアの本質に迫るシステムの構築に向けた取り組みとして、十分効果がある。

具体的には、(1) 介護過程の展開を用いたことによる介護職員と学生の事例に対する相互理解を深める効果がある。(2) 発表者の振り返り機会を提供する場となり、更なるケアの向上や次の事例発表に向けた意欲の向上につながる。(3) 学習プログラムとして改善の余地はあるものの、学び合いの方法として介護過程の展開を

用いた方法は効果が見込める。

### 2 今後の課題

継続的な実施には現場における介護過程の意味について理解が深まることが重要である。「私の思い」に重きを置いたアセスメントの方法について、短期間で効果を求めるためにアセスメント項目を焦点化したことについて、十分な効果測定がおこなえていない。

また、学生が用いた「私の思い」をまとめるツールは、詳細なアセスメント項目を併用することで有効となるものである。流用するにしても、学生が混乱なく実施できることが必要である。この部分の検証を行う必要がある。

この取り組みを始めて実施するために、理解の得られた3か所で実施したが、明らかにサンプル数として不足している。しかし、1校のみでの対応は限界がある。

介護福祉士養成校はおおむね4年制と2年制の養成校が存在するが、本研究のようなプログラムを2年制の学生に求めることは相当困難との所感を持っている。その意味ではこの取り組みの広がりには、更なる運用上の課題を整理する必要がある。

これらの改善点を修正して、「私の思い」の浸透がはかられ、広く介護の倫理観の醸成につながるようなシステムを構築していくことが今後の課題である。

### 参考文献

- 1) 一番ヶ瀬康子監修：『新・介護福祉学と何か』、ミネルヴァ書房、2000。
- 2) 石橋信二他：『介護福祉国家試験・技術試験免除のための介護技術講習会テキスト』、2005。
- 3) 井上千津子：『介護とは』、『新・介護福祉学と何か』、ミネルヴァ書房、2000。



- 4) 太田貞司：「介護福祉学」の構築に向けて：介護福祉を再考する，介護福祉学，20(2)，pp166-171，2013.
- 5) 太田貞司：「認定介護福祉士」（仮称）創設と介護福祉士養成教育の今後，介護福祉教育，18(2)，pp.20-23，2013.
- 6) 介護福祉士養成講座編集委員会編，『新・介護福祉士養成講座9 介護過程』第2版，中央法規出版，2011.
- 7) 黒澤貞夫編著：『ICF をとり入れた介護過程の展開』，建帛社，2007.
- 8) 黒澤貞夫・峯尾武巳編著：『介護福祉士養成テキスト・12 介護過程の展開』，建帛社，2008.
- 9) 黒澤貞夫：新カリキュラムにおける介護福祉士の専門性を考える，介護福祉教育，16(1)，pp.6-15，2010.
- 10) 黒澤貞夫：生活支障の特徴からみた介護—さまざまな事例を通して—，介護専門情報誌 介護福祉，(78)，2010.
- 11) 黒澤貞夫：介護福祉士の専門性の創造について，

介護福祉教育，17(1)，pp.10-15，2011.

#### 注釈

- 1) 杉山せつ子：介護福祉ニーズに視点をのいた介護過程（介護過程の展開ツール）の研修効果 その1：聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要 No.13（2015）
- 2) センター方式とは認知症介護研究・研修東京センターが開発したアセスメントツールの一つで，本人を主語にして書き込む方式になっていること，本人のありのままの声と行動，場面を観察し，事実に基づきながら「本人はどうか」，本人の視点にたって考えながら記入することが最大の特徴である．
- 3) 「認知症の人のためのケアマネジメント センター方式シートパック（解説付）2008.7，認知症介護研究・研修センターケアマネジメント推進室
- 4) 本学で導入している C- ラーニングシステムは教員が学生に対して自由に質問項目を設定して，対象者を限定の上で手持ちのデバイス（PC，スマートフォン等）を活用して回答できる．